

日付:2014年8月3日／聖書:創世記22:1～19

主題:「主の山に、備えあり」

この箇所はアブラハム物語の最高潮ともいえよう。神は、アブラハムを試みられた。「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい」。この思いがけない試練の中で、アブラハムは何を思ったであろうか。アブラハムの内面には殆ど触れられていない。ただ、神に真実に従うアブラハムの姿が記されている。

アブラハムは、主の山の途上で「きっと神が備えてくださる」と言う。これは、最も苦しい山の途上で神を信じる信仰にすぎたわけである。ここに「主の山に、備えあり」とある。主が向かわせる試みと、主がくださる備えは、別々のものではなく、一つであるということ。アブラハムは、この試練の中で神に委ねる信仰において、この試練の山を登ったわけである。

福音書でイエスは、《自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである》(マルコ8:35)と言われた。自分の救いの事だけ、命の事だけを求める者は、それを失う。しかし、主のため、福音のため(他者のためと置き換えてもいいだろう)、そのために命を失う者は、それを救う。主の備えを頂くことになるということ。また、パウロも《あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます》(Iコリント10:13)と。試みる神と備える神は、同じ神なのである。神は真実な方であるがゆえに、試みと備えを一つとして私たちにくださる。このアブラハムの最高潮の物語は、結局はアブラハムが真実ということではなく、神が真実な方であるということが語られなければならない。

最後に、主の山に備えられていたのは、木の茂みに角をとられていた一匹の雄羊。試練の山を苦しみ悶えながら登り詰めた時、そこには身代わりとなる一匹の雄羊が備えられていた。この一匹の雄羊こそ、まぎれもなくキリストのことである。私たちは、主の山に向き合っている者か？神が、行きなさいという道を行く者か？主の山にこそ、主の備えがあることをこのところから教えられたい。私にとって主の山とはどこなのか？(神谷)